



多彩で優雅な色漆が美しい香川漆器。蒔^{きんま}、存^{ぞんせい}清^{ちようしつ}、彫^{ひょう}漆^{しつ}、俊^{ことうぬり}藤^{ふじ}塗^{ぬり}、象^{ぞうこくぬり}谷^や塗^{ぬり}の5つの技法が用いられる。

讃 樹 會

令和5年2月1日発行

CONTENTS

- 02 年頭所感
- 04 同窓生教授就任挨拶
- 06 新任教授就任挨拶
- 08 2022年度研究助成金／研究奨励金 受賞の言葉
- 10 ニュースの窓
- 15 理事会議事録
- 17 学会開催報告
- 20 追悼
- 22 関連病院紹介【四国こどもとおとなの医療センター】
- 25 書籍紹介
- 26 私のキャリア
- 28 支部会・懇親会
- 32 学生の短期留学報告
- 34 学生支援（競争的資金）活動報告
- 36 医学部祭開催報告
- 38 編集後記／事務局からのお知らせ

発行 香川大学医学部医学科同窓会讃樹會
〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1
TEL/FAX 087-840-2291
E-mail mddousou@kagawa-u.ac.jp
<https://dousoukai.site/sanjukai/>

発行人 平川栄一郎
編集人 谷 丈二
印刷所 株式会社





年 頭 所 感

新しい時代に向けた人材育成のはじまり

讀樹會副会長

中村 文洋 (平成7年卒・10期生)



同窓会の皆様、新しい年をつつがなくお迎えされたことと存じます。平素より、同窓会活動に多大なるご支援を賜り、心より感謝申し上げます。新型コロナウイルス感染症の影響が現在も続いており、4年目に入りました。皆様におかれましては、日々のご対応にご尽力されていることと存じます。

この1年、新型コロナウイルスの影響だけでなく、歴史に残るような様々な出来事がありました。まずは、昨年2月より現在も続いておりますロシアのウクライナへの侵攻が挙げられます。多くの命が犠牲になっている報道を耳にすると、いたたまれない気持ちになります。またこの戦争の影響で輸出減や原材料費の高騰により物価高が進み、私達も医療そして生活においても実感せずにはいられません。次に、7月に元首相の安倍晋三国会議員が銃撃を受け、懸命な治療が行われましたがお亡くなりになりました。これも大変衝撃を受けた事件でした。暗いニュースばかりではなく、北京冬季五輪とサッカーワールドカップの2つの大きなスポーツの祭典が行われました。どちらの大会においても、日本チームの活躍が私たちに勇気を与えてくれました。一方、医療に関しての出来事として「医学教育モデル・コア・カリキュラム」の改訂がありました。「医学教育モデル・コア・カリキュラム」は、2001年から導入され今回が5回目の改訂となります。今回の改訂では、「総合的に診れる」と「情報に強い」の2つが大きな改善点になります。新しい時代に対応できる人材を育成していくためのカリキュラムとなっています。私は現在、医学教育に関する仕事をしておりますので、「医学教育」の観点から、医療改革について触れてみたいと思います。

新しい年である本年(2023年)では、昨年の「医学教育モデル・コア・カリキュラム」改訂に続き、「共用試験の公的化」が行われます。既に多くの方がご存知のように2005年より本格導入された共用試験は、知識・問題解決能力を評価するCBT(Computer Based Testing)と診察技能を評価するOSCE(Objective Structured Clinical Examination)の2つで構成され、現在の臨床実習である「診療参加型臨床実習(Clinical Clerkship)」に進むための試験になります。これまで、各大学で独自の合格基準で行われていましたが、2023年より全国統一化され、法的に医学生の処方以外の医行為が認められることとなります。

学生の立場として、共用試験の公的化は、国家試験が2回になることを意味します。また法的にStudent Doctorの身分が守られる(医行為を行っても良い)ようになります。かつてテレビで放映されていたアメリカの医療ドラマERのように病院内で医学生の活躍が期待できます。実習を指導する立場からは、これまで研修医の先生方が行っていた医行為が、学生でも実施可能になりますので、マンパワー不足の改善に貢献できる可能性があります。これは、来年2024年から始まる「医師の働き方改革」にも関係してきます。医師の労働時間が制限されるので、いかに医療の質を維持するかが重要になってきます。Student Doctorに活躍してもらうことが、その対策の一部となり得ることも検討されています。医学教育に先進的な大学では、既にシミュレーションも行われているようです。また再来年には、後期高齢者が国民の約1/4に達する「2025年問題」が迫っています。

このように多くの問題を抱えている新しい時代に適応できる若い先生方が育っていくことを願ってやみません。そのためにも、私達がそれぞれの立場でサポートできる体制を作ることが重要になるかと思えます。同窓会としても、会員の皆様との情報共有、諸問題に対する提案そして支援ができるよう考えて参りたいと存じます。

まだコロナ禍ではございますが、「with corona」で少しずつ行動ができるようになっております。コロナで一気に普及したりリモートによる診察そして学会でしたが、行動制限の解除で対面での学会が復活し、対面の良さが再認識されています。今後、コロナが収束し、各学年の同窓会が対面で開催されるようになればと心より願っております。本年が皆様におかれまして、良い1年になりますよう祈念いたしまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。



同窓生教授就任挨拶

教授就任にあたって

“生みの親、育ての親”



順天堂大学大学院医学研究科麻酔科学 主任教授
 大学院医学研究科疼痛制御学 主任教授（併任）
 医学部麻酔科学・ペインクリニック講座 主任教授（併任）

かわごえ
川越 いづみ（平成12年卒・15期生）

この度、2022年10月1日付で順天堂大学医学部麻酔科学・ペインクリニック講座主任教授に就任いたしました。讃岐の冊子は同級生の夫と毎回楽しみに拝読しております。執筆の機会をお与えいただき感謝いたします。

私は神奈川県生まれで、1994年に香川医科大学医学科に入学しました。瀬戸内の温暖な気候と温かい人々にめぐまれた豊かな6年間を過ごしました。

私の一番のライフイベントは6年生の卒業試験中に香川で娘を出産したことです。子育てと両立しやすいからと父に勧められて麻酔科医になることに決め、卒業後は東京大学医学部附属病院 麻酔科・痛みセンターに入局しました。初期研修を経て虎の門病院に出向し、心臓・肺・食道などの胸部の麻酔を中心に4年間研修し、麻酔科専門医を取得しました。今ほどママさん医師の権利が認知されていない時代ですので、“ネイティブママさん”の私は、平日は娘を母と妹に預けっぱなしで、他の医局員と同じ勤務をこなしていました。しかしその直後、母が白血病になり、虎の門病院での常勤が難しくなり困り果てていたところ、自宅近くの順天堂江東高齢者医療センターで麻酔科医を募集していることを知り、渡りに船で入職したのが順天堂大学とのご縁でした。2010年より順天堂医院（本院）に赴任し、主に呼吸器外科麻酔に関する臨床・教育・研究に従事しています。基礎研究では大学の同級生の井上茂亮氏（神戸大学）と肺癌患者における麻酔と免疫抑制の研究でコラボしています。また呼吸器外科麻酔での手技やデバイスについての臨床研究や教育を国内外へ発信してきました。この発信と経験症例数が評価され、現在は欧州胸部麻酔学会（EACTAIC）の委員も務めており、麻酔科領域での国際学術活動の推進も行なっています。この根本には、私の“生みの親”である香川医科大学建学の精神“讃岐の丘から世界へ”が大きく影響しています。讃岐の丘には新設医大ならではの自由でのびのびとした雰囲気があり、卒業後もし

がらみのない活動ができます。後進の先生方にはこの建学の精神と風土を受け継ぎ、誇り高い日本人として世界で渡り合って欲しいと思います。また、自分が熱中できることをみつけて、それを軸に多角的に活動を発展させるとリサーチマインドを持続できる気がしています。

香川大学麻酔科とは、2018年に白神豪太郎教授より医局勉強会にお招きいただいて以来のお付き合いです。今後さらに当講座と香川大学とのご縁が深まることと期待しています。東京で麻酔やペインクリニックを学びたい、研究をしたい、働きたい（就職、転勤、国内留学など）、お気軽にご連絡ください。大歓迎です。先日、順天堂大学小川秀興理事長から教授の辞令交付された際に、ご自身は香川県三豊出身で長尾吾元香川大学長とは丸亀大手前高校の同門で親しい間柄と伺い、あらためて香川大学と順天堂大学との深いご縁を感じました。

香川医大附属病院で柳原敏宏先生に取り上げていただいた娘は、難治疾患研究所の大学院でゲノム機能情報の研究に励んでいます。彼女の年齢＝私の医者歴であり時の流れを感じさせます。ここまで麻酔科医を続けながら家族が健やかに過ごせたのは、周りに恵まれたおかげであり、とくに私をいつも理解し、厳しく的確な助言をくれる夫のおかげと感謝しています。

私はネイティブママさんですが、ノンネイティブのママさんはさらに苦勞も多いと思います。女医さんは優等生気質の人が多く、医師で70点子育ても70点の自分に納得がいけないかもしれません。しかし合計140点ですから自信をもってください。子供が小さいうちは「患者と子供が元気ならOK」という大らかな気持ちで過ごしてください。一人で悩まず、周りの人に頭を下げて素直に甘えてください。その時は心苦しくても、将来後進に恩返しする気持ちがあればよいのです。母は常に“明るく・強く・美しく”これが永く働き続ける秘訣です。

麻酔科学は、手術麻酔、集中治療、疼痛医学、救急医学からなり、医学の中で最も多様な専門分野の一つで医療の根幹を担っています。私の“育ての親”である順天堂大学は1838年設立の日本最古の医学塾であり、当講座は1963年に外科から麻酔科として独立し、私が第7代主任教授となります。現在、順天堂5病院で働く麻酔科医局員の約55%が女性です。子育て経験を活かし多様性を受け入れる温かく包容力のある組織を構築し、世界に通用する優秀な人材を育成するとともに、若い世代にマッチする労働環境の整備につとめ、全国の教室にそのノウハウやシステムを発信していくことが私の使命と考えています。残りの麻酔科医人生はプレーヤーからマネージャーにシフトし後進のために尽力していきます。香川大学医学部の同門の先生方におかれましては、引き続き、ご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。讃岐の丘の益々のご発展とご健勝を祈念いたしましてご挨拶とさせていただきます。

略歴

2000年3月	香川医科大学医学部卒業
2000年4月	東京大学医学部附属病院 麻酔科研修医
2002年4月	虎の門病院 麻酔科 医員
2006年4月	順天堂大学医学部 麻酔科学・ペインクリニック講座 助手
2008年4月	同 助教
2014年12月	同 准教授
2022年2月	同 先任准教授
2022年10月	同 主任教授

資格・委員

(国内)

日本麻酔科学会指導医・機構専門医、日本集中治療医学会専門医

日本臨床麻酔学会（神経ブロック）教育インストラクター

日本麻酔科学会代議員、国際交流委員、APSF 日本語翻訳WG、呼吸WG

日本臨床麻酔学会 評議員、気道管理学会評議員

(国外)

CAMES (Copenhagen Academy for Medical Education and Simulation) 気管支鏡指導医コース修了

EACTAIC (欧州胸部麻酔学会) 公認・胸部麻酔プログラム修了

EACTAIC Thoracic Subspecialty Committee Member
PROTHOR National Coordinator

International Airway Management Society Collaborator

新任教授就任挨拶

教授就任にあたって

“Surgeon-Scientist”の育成を目指して



香川大学医学部
整形外科学 教授

いしかわ まさかず
石川 正和

讃樹會会員の皆様、初めまして。この度、香川大学医学部整形外科学初代上野良三教授から二代目乗松尋道教授、三代目山本哲司教授と築いてこられた講座の四代目教授を拝命しました石川正和と申します。会員の先生方に謹んでご挨拶申し上げます。

高校卒業後30年の時を経てこの香川の地に赴任致しましたが、讃樹會の皆様私の経歴をご紹介させていただきます。

私は、この香川県高松市に中学3年生の時にやってきました。高校卒業後、徳島大学医学部医学科に入学し、1998年の卒業と同時に、膝関節外科医を目指し、私の恩師の一人であります越智光夫先生が主宰する島根医科大学整形外科学教室に入局しました。その後、2年目に大学院に入学、大学院4年目には神戸の理化学研究所、先端医療センターの研究員として血管内皮前駆細胞の研究に携わりました。2004年からは越智先生が異動された広島大学整形外科学教室に引き入れて頂き、細胞療法を中心とした臨床研究の立ち上げ、基礎研究のサポート、研究資金獲得と大学院生の指導に携わりました。2009年1月からはオハイオ州クリーブランドのCase Western Reserve UniversityのCardiovascular Research Instituteに迎え入れて頂き、Senior research associateとして研究室の立ち上げ、フェローの指導を行いながら血管内皮前駆細胞を中心とした基礎、臨床研究とベンチャー企業の立ち上げに奔走しました。約4年間悪戦苦闘しましたが、なかなか道は厳しく、2013年に越智先生のご高配で整形外科医として、再度臨床に向かい合う機会を広島大学整形外科学教室で用意して頂きました。2016年1月には研修医時代の指導医であり、家族同様にずっとお世話になってきた安達伸生先生が広島大学整形外科学教室の教授に就任され、広島大学整形外科学教室の運営に携わらせて頂きました。2018年には人工関節・生体材料学講座の寄附講座准教授を拝命し、膝関節外科医として研鑽しました。いくつもの場所でお仕事をさせて頂きながら、2022年9月1日よりこの香川大学医学

部整形外科学講座に着任した次第です。

研究に関しては、越智先生が1996年より世界に先駆けて組織工学的手法を用いた自家培養軟骨移植術を日本で開始されていて、日本における軟骨再生医療の始まりを間近に触れることができました。1999年には大学院に入学し、軟骨細胞の至適培養条件を探索する研究テーマを頂きました。自分のテーマで研究をしたいと思い、ヒト臍帯血から間葉系幹細胞の単離・培養と骨細胞への分化に挑戦しました。その繋がり、末梢血由来幹細胞の研究に興味をわき、神戸の理化学研究所、先端医療センターで血管内皮前駆細胞の研究を行っていた浅原孝之先生の研究室で勉強する機会を手に入れました。そこでは幹細胞生物学の知識、経験を深めることができました。2004年に広島大学へ移ってからは、血管内皮前駆細胞の整形外科学領域への応用を目指した基礎研究を、その臨床応用では股関節グループと大腿骨頭壊死患者に対する自家骨髄単核球移植術を立ち上げました。Case Western Reserve Universityで血管内皮前駆細胞培養技術を開発し、企業化を模索しました。2013年の日本帰国後からは、細胞療法から医療機器開発に視点を変え、光干渉断層画像を用いた軟骨組織の評価、関節鏡視下で使用可能なレーザーポインターの開発、色情報を用いた軟骨組織評価方法の開発、超細径関節鏡の開発と臨床研究の実施などに加え、遺伝子組み替えタンパクを用いた半月板修復・再生療法の開発を目指した基礎研究から、医師主導治験まで、広島大学の安達教授、大学院生、スタッフと従事して参りました。様々な人、会社とコミュニケーションをとりながら研究を進めていくのが私のスタイルとなっております。

臨床に関しましては、膝関節症例を中心に業務を行って参りました。細胞療法を中心とした再生医療の立ち上げを行い、2013年に広島に再度赴任してからは下肢靭帯再建術、骨切り術、人工膝関節置換術を中心に再生医療である自家培養軟骨移植術も含めて症例をこなして参りました。ライフワークとしては小児の希

少疾患であります膝離断性骨軟骨炎、外側円板状半月、膝蓋骨不安定症の画像診断、治療成績に関して研究してきました。人工関節に関しては、より安全で正確な人工膝関節置換術を目指しロボット支援手術を含めたComputer Assisted Surgeryを行ってきました。

今後は、1. “謙虚”な整形外科医、2. “患者さんの声”に耳を傾けることができる整形外科医、3. “愛”ある整形外科医、を掲げ、香川県民の皆様に、小児から高齢者まで関節温存、高いQuality of Lifeを目指したトータルソリューションが提供できるよう努力して参ります。

また、William Oslerの言葉“The practice of medicine is an art, based on science.”に表されるように、私たちの職業からscienceを切り離すことは不可能です。日々の診療を行う上でscienceを常に意識し、医療に貢献するための“Surgeon-Scientist”の育成を目指します。

教室の運営に関しては、時間がかかるかもしれませんが、全てのグループが“Surgeon-Scientist”として香川大学医学部整形外科学講座の看板を背負うに値する医療を提供できる整形外科医の育成と、人が集まる医局にできるよう努力して参ります。そして、この香川の地から全国、世界へ羽ばたける整形外科医を創出

するために尽力する所存です。

香川で仕事をして良かった、香川に来て良かったと将来振り返れるように、これまでと変わらぬスタイルで精進し、魅力ある教室にしていく所存ですので、ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

末筆ではございますが、香川大学医学部医学科同窓会の皆様のますますのご健康とご発展を心より祈念いたします。

略歴

平成10年3月 徳島大学医学部医学科 卒業
6月 島根医科大学医学部附属病院 医員（研修医）
平成15年4月 神戸市地域結集型共同研究事業 特別研究員
平成17年4月 国立大学法人広島大学非常勤職員 COE 研究員
平成20年8月 広島大学病院 病院助教
平成21年1月 米国 Cardiovascular Research Institute, Case Western Reserve University (Cleveland, OH) Senior research associate
平成25年5月 広島大学病院 病院助教
平成27年4月 広島大学大学院 助教
令和元年4月 広島大学大学院 医系科学研究科 人工関節・生体材料学 寄附講座准教授
令和4年9月 香川大学医学部 整形外科学 教授
現在に至る

2022年度研究助成金/研究奨励金 受賞の言葉

研究助成金部門



浜松医科大学内科学第三講座循環器内科

坂本 篤志 (平成16年卒・19期生)

このたびは香川大学医学部同窓会・讃樹會より研究助成金を賜りました事、大変光栄に存じます。また、ご審査いただきました諸先生方ならびに本会会員の先生方に、この場をお借りして深く御礼申し上げます。

私は2004年(平成16年)に香川大学を卒業後、故郷の静岡県浜松市へ戻り、浜松医科大学内科学第三講座へ入局し、循環器内科医として市中病院で卒後9年目まで主に心臓カテーテル検査・治療を中心とした臨床業務に従事しておりました。卒後10年目より浜松医科大学大学院に進学し、「心筋脂質毒性におけるn-3多価不飽和脂肪酸の心保護効果と心筋ミトコンドリア形態変化の関連性」をテーマとした基礎研究に従事し、2017年に学位を取得いたしました(Sakamoto A, Exp Cell Res. 2017.)。大学院卒業後、讃樹會より国外留学助成金をいただき、海外研究留学を経験する機会を得ました。2017年9月から2021年8月までの4年間、米国メリーランド州ゲイザーズバーグにありますCVPath Instituteにて主に動脈硬化症や心血管デバイスに関する基礎病理研究に従事させていただき、多岐にわたる研究プロジェクトに関わることができました。帰国後の2021年9月からは、再び浜松医科大学内科学第三講座にて研究・教育・臨床業務にあたっております。

今回採択いただきました研究題目は「出血刺激に対するマクロファージの炎症反応応答と冠動脈硬化進行の病態解明のためのトランスレーショナルリサーチ」

です。私は米国留学中に、動脈硬化巣における粥腫内出血とマクロファージの分子生物学的な相互作用をテーマとして、主に病理学的な観点から研究を進めてきました。ヒト剖検心検体、動脈硬化モデルマウス、末梢血単核球由来のマクロファージと培養血管内皮細胞を用いた包括的な検討の結果、粥腫内出血部位では、出血刺激に対するマクロファージの炎症応答が粥腫線維性被膜内のアポトーシスを惹起することでその菲薄化を助長し、最終的な粥腫破綻に寄与する可能性を見出しました(原著論文投稿中)。そうだとすれば、実臨床において、急性冠症候群を発症する者ではそうでない者と比較して、末梢血単核球由来マクロファージの出血刺激に対する炎症反応応答がより顕著であることが想定されます。このメカニズムの更なる証拠を得るため、本研究では、マクロファージのヘモグロビン刺激に対する炎症反応応答と動脈硬化性疾患の表現型との関連性を、患者臨床血液検体を用いて検討いたします。また、マクロファージにおけるヘモグロビン炎症応答の評価が、冠動脈疾患のハイリスク群層別化における新たなバイオマーカーとなる可能性も期待できると考えております。

香川大学同窓生として、本助成金を大切にに使わせていただき、微力ながら医学の発展に少しでも貢献できますよう、歩みを止めずに精進を重ねていく所存です。同窓の先生方におかれましては、これからも引き続きご指導ご鞭撻の程をよろしくお願い申し上げます。

研究奨励金部門



香川大学医学部附属病院 消化器・神経内科

大浦 杏子 (平成22年卒・25期生)

この度は令和4年度讃樹會研究奨励金に採択していただき、誠にありがとうございます。私は平成22年に

香川大学医学部を卒業後、本学消化器・神経内科に入局し、消化器内科医・肝臓内科医として臨床経験を積

み、専門とする肝疾患を中心に研究活動も行ってきました。未だ予後不良とされる進行肝細胞癌の治療成績向上につながる研究がしたいと考え、「切除不能肝細胞癌に対する全身薬物療法の治療効果を予測するための血管新生分子と関連するmicroRNA (miRNA) の同定」を本研究テーマに選ばせていただきました。この場をお借りしまして、讃樹會関係者の皆様および御審査いただきました先生方に深く感謝申し上げます。

近年の肝細胞癌の特徴として、B型・C型肝炎の新規感染者の減少および抗ウイルス療法の普及に伴い、肝炎ウイルス性肝細胞癌が激減する一方で、非ウイルス性肝細胞癌が急増しています。十分なスクリーニング検査が実施されていないため、脈管浸潤や遠隔転移を伴った進行癌で発見されることも多く、進行肝細胞癌に対する集学的治療が今後ますます重要と思われまます。進行肝細胞癌に対する薬物療法として、本邦ではsorafenibおよびlenvatinib、regorafenib、ramucirumabが使用可能であり、2020年9月には癌免疫複合療法としてatezolizumab/bevacizumab併用療法が薬事承認されました。治療選択肢が増える一方で、その治療戦略では有効な薬剤を選択し、無効な場合には適切なタ

イミングで次治療に切り替えることが肝要であるものの、エビデンスは限られており、治療成績向上につながるバイオマーカーの研究が必要であると考えました。

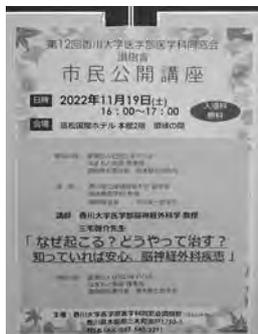
miRNAは蛋白の翻訳を制御する18~25塩基のnon-coding RNAであり、癌の制御機構など様々な生命現象に関連する分子です。複数の存在形式があり、細胞内に含まれるmiRNA以外に、①細胞外を循環するエクソソーム内に含まれるmiRNA、②脂質・蛋白質に結合するmiRNA、③アポトーシス正体に含まれるmiRNA、④ネクローシスによって細胞外に漏出したmiRNAがあり、エクソソームmiRNAを中心に各癌腫との関連が報告されています。当研究室は消化器疾患におけるmiRNAに関して多くの研究業績があり、これらを基盤として、肝細胞癌に対する分子標的治療の効果・薬剤耐性を予測するmiRNAを同定し、エクソソームやその関連分子を標的とする治療への応用も期待できると考えております。

最後になりますが、この奨励金を有効に活用し、良い研究成果が報告できますよう、日々精進してまいりますので、ご指導のほどお願い申し上げます。

ニュースの窓

第12回讃樹會市民公開講座開催報告

2022年11月19日



「なぜ起こる? どうやって治す? 脳神経外科疾患」

講師 香川大学医学部脳神経外科学教授 三宅 啓介先生

(平成5年卒・8期生)

第12回讃樹會市民公開講座が、11月19日（土曜日）に高松国際ホテルで開催されました。昨年はコロナ禍の感染拡大を懸念して中止しましたので、1年空けての開催となり、感染予防に留意した体制で80名の参加者をお迎えしました。

濱本龍七郎名誉会長（1期生）の開会の挨拶に続き、座長の平川栄一郎会長（1期生）から、講師である香川大学医学部脳神経外科学教授三宅啓介先生（8期生）のご略歴と本日の演題「なぜ起こる? どうやって治す? 脳神経外科疾患」が紹介されました。

ご講演は、脳疾患について解剖生理から始まり、脳卒中の原因、危険因子、脳卒中が起きたらどうするか、そして治療について、科学的なデータを示しながら非常にわかりやすくお話いただきました。

まず脳神経外科は、脳や脊髄に生じる疾病の予防と、急性期並び慢性期の治療を網羅的に行う診療科であり、こうした外科的な目と技を持った神経の総合医であるという紹介から入り、脳の解剖図を用いて、言語、視覚、口、顔、手や足など運動領域や感覚領域など、脳の場所によって異なった機能を司っているが、それぞれの機能が連絡しあい統合的に働いていることを説明しました。



現在、日本人の死亡率でもっとも多い疾患は癌ですが、心臓疾患と脳血管障害を合わせるとそれに匹敵することから、健康寿命延伸のために国が脳卒中や心臓病その他の循環器病に対して対策を推し進めています。今回は脳外科疾患の中でも、寝たきりになる患者さんが圧倒的に多い脳血管障害についての話となりました。



脳卒中を発症する危険因子である高血圧、糖尿病、脂質代謝異常、心房細動など不整脈、アンバランスな食生活や喫煙、過度の飲酒などについて、一つ一つ具体的な予防法を説明いただきました。例えば血圧計で毎日朝夕測定して記録する、血圧の目安を知りコントロールしていく、ヘモグロビンA1Cの検査結果に注意する、動悸やふらつきを放置しない、脈の規則性に注意して不整脈をチェックするなどの他にも、喫煙はしっかりと止めること、加熱式たばこは禁煙にはならないとも述べられました。

食生活に注意していただくために、フレイルと低栄養の悪循環について触れ、バランスのとれた食事を、適量である腹八分で行うことが大変大切であると説明しました。酢や山椒などをうまく使って味付けし塩分を控えるように努める。一日30品目はなかなか難しいので、ご飯は白、カボチャは黄色、ブロッコリーは緑、しいたけは黒など、目安として一日で7色の食品を食べるように考える。アルコールは週に1～2日は休肝日を持つ、運動は一日30分以上、少し息がはずむくらいのスピードで歩くと良い、などの具体例を挙げ、参加者がすぐにでも取り組みやすい内容の説明をしていただきました。さらに、LDLコレステロールの累積データから、戦後50年の間に脂肪摂取の割合が3倍にも増えている現代の食生活に関して注意を呼びかけました。

本日覚えて帰ってほしい脳卒中の症状のポイントとしてFAST (Face: 顔面麻痺、Arm: 腕の麻痺、

Speech: ことば、Time: 時間) についての説明や、てんかん発作は小児だけでなく、最近は高齢者に多くみられる、そのため、高齢者でてんかんに見られる発作の症状、リハビリはリハビリをしている時だけでなく、その後も大変大切であることや、薬を飲んでいる時は勝手にやめずに医師に相談してほしいと話されました。

大学ではフローダイバーターなどの様々な最新の血管内治療を行っていると共に、今年より開始された国の脳卒中中心臓病総合支援センターモデル事業に香川大学が選ばれました。脳神経外科としては、県民のみなさんの脳卒中あるいは心臓病に対して健康づくりを啓蒙し、健康へのサポートを充実させていきたいと考えているとまとめられました。

お話の途中では、25年前、NIH (米国立衛生研究所) の研究所で働いている折に、ABCG2遺伝子を発見された話も伺うことができました。ABCG2は抗がん剤の耐性メカニズムの1つとして考えられていますが、最近では幹細胞の発生メカニズム、ミトコンドリア内のアミノレブリン酸の代謝機構に、そして腎臓における尿酸排泄に係るメカニズムなどさまざまな機能を有していると考えられています。

質疑応答で座長の平川先生から脳動脈瘤の健診について質問があり、健診のタイミングと間隔について年齢別に説明いただきました。

最後に、濱本名誉会長から讃樹会の紹介と会場の参加者への謝辞が述べられ、盛会のうちに閉会となりました。



講演会場風景

医学部生が新たな高血圧の発症機序を提唱

2022年12月27日

医学部生が新たな高血圧の発症機序を提唱

～ 腎臓-皮膚連関の視点から ～

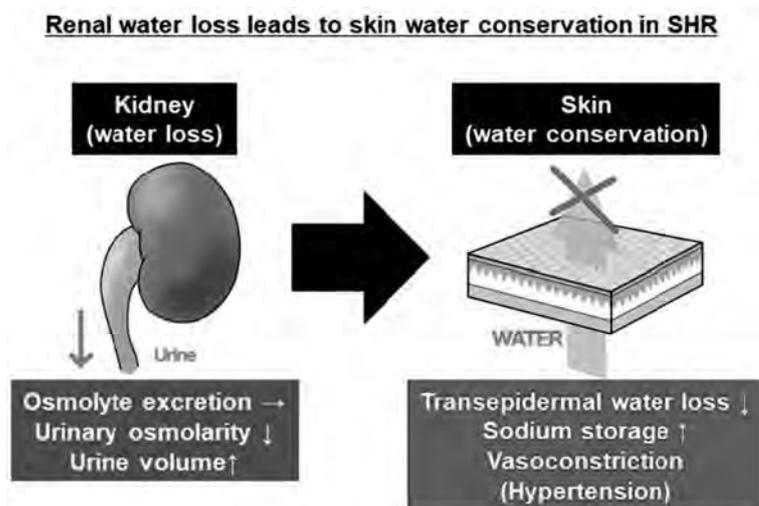
小倉卓浩さん（医学部医学科4年生）の医学部薬理学での研究成果が、第29回国際高血圧学会で Young Investigator Silver Awardを受賞しました。さらに、インパクトファクターが高い国際医学誌 Hypertension Research誌にも掲載されることが決定いたしました。

日本人の3人に1人が罹患している国民病である高血圧症は、脳卒中・心不全・腎臓病などを発症する原因として最も重要とされています。しかし、ほとんどの高血圧症は「本態性高血圧症」と呼ばれ、発症メカニズムが明らかになっていませんでした。今回、香川大学医学部薬理学（西山 成教授）所属の医学部医学科4年生の小倉さんは、本態性高血圧症のモデルである自然発症高血圧ラット（SHR）を用いた研究をデューク-シンガポール国立大学（Duke-NUS）と共同で実施し、腎臓-皮膚連関の観点から新たな高血圧の発症機序を発見しました。その研究成果は第29回国際高血圧学会で発表されましたが、非常に高い評価を受け、Young Investigator Silver Awardが授与されました。また、その研究内容は高血圧国際専門誌である Hypertension Research誌（Impact factor 5.525）にISH2022-Fast trackとして掲載されることが決定しました（2023年1月号掲載予定、責任著者：北田研人助教）。

研究内容：

腎臓は尿を作って体内の電解質や水分量を調節し、血圧をコントロールしています。これまでは腎臓の機能が低下すると高血圧が発症すると考えられてきましたが、その詳細なメカニズムは全く不明でした。一方で皮膚も不感蒸泄（経皮水分蒸散）や発汗を介して体液量に影響を与えていますが、今回の研究によって、腎臓と皮膚による電解質・体液制御機構が関与する高血圧発症メカニズムが世界で初めて明らかとなりました。

本研究により、自然発症高血圧ラット（SHR）では腎臓の尿を濃縮する能力（水再吸収力）が低下しており、尿量（水排泄量）が増加して体液喪失が生じていることが見出されました。また、この体液喪失を補うために皮膚の電解質蓄積と血管収縮を生じ、皮膚からの水分喪失を抑制して体内の水分量を維持していることが明らかとなりました。さらに、この過程で生じた皮膚血管収縮が血圧を上昇させる要因であることを証明しました。これらの研究結果は、謎とされていた本態性高血圧症の発症機序の解明につながるものとして、世界中から注目されています。



今後の展望

本研究は本態性高血圧のモデル動物である自然発症高血圧ラットSHRにおいて、「腎臓からの水分喪失とそれを補うために生じる皮膚の体液保持が高血圧を発症させる原因である」ことを世界に先駆け新たに提唱したものです。将来的にヒトの本態性高血圧患者においても同様のメカニズムの存在が証明できれば、新しい高血圧の予防・治療法の開発へつながることが期待されます。

荻尾七臣Hypertension Research誌編集長より

本研究は国際高血圧学会2022の優秀演題に選ばれ、さらにHypertension ResearchのRapid publicationで発表された大変優れた論文です。その研究を現役の医学部学生が第一著者で発表したことは、大きな驚きであるとともに、まさに素晴らしい快挙であります。香川大学の研究指導体制に加え、御本人と指導された先生の御努力と情熱に敬意を表します。

発表論文

Ogura T, Kitada K, Morisawa N, Fujisawa Y, Kidoguchi S, Nakano D, Kobara H, Masaki T, Titze J, Nishiyama A. Contributions of renal water loss and skin water conservation to blood pressure elevation in spontaneously hypertensive rats. *Hypertension Res* 2023 Jan ; 46 (1) : 32-39. DOI : 10.1038/s41440-022-01044-6.

(URL: <https://www.nature.com/articles/s41440-022-01044-6>)

香川大学 HP News Releaseより転載

子宮頸がん予防イベント Women's Health awarenessの実施報告 2022年7月19日

高松市保健所 藤川 愛 (平成13年卒・16期生)

讃樹會様から新たに協力を得て、令和4年7月19日に開催した子宮頸がん予防イベントをご報告します。香川県総合健診協会と香川県・高松市では、平成29年から子宮頸がん予防イベントを毎年7月に開催していましたが、令和2年度以降はコロナによる受診控えによる検診受診率の低下が懸念されたものの、令和4年度からキャッチアップ接種推奨が追い風になり、がん検診+HPVワクチンの重要性が強調され始めました。ちょうど丸亀町商店街振興組合様から本イベントに賛同&会場の無償貸出の申し出を受け、丸亀町に場所を変えての開催にいたりしました。またリニューアル開催に際して、講演のみならず高校生向けの婦人科見学会も新たに組み込みました。

若い世代からの主体的な情報発信のため、香川大学医学生ボランティア参加の必要性を讃樹會様にご相談し、理事会にて後援のご承認を経た後、医学部長の三木崇範教授からご紹介頂いた医学生ボランティア9名に参加頂きました。(医学生には、健康科学・産婦人科医の塩田敦子教授からのZOOMレクチャーを行い、子宮頸がんとHPVワクチンについての理解を深めて頂きました。)

講演会には講師2名(8期生の周産期学婦人科学教授の金西賢治教授、7期生りんくう総合医療センター産婦人科部長の荻田和秀先生)にご快諾頂き、リビングたかまつ新聞を発行する谷本小百合編集長と「子宮頸がん予防特集」も企画し、令和4年7月15日号にお二人へのインタビュー含めた表紙2ページ特集を組み、本イベント告知も含めて事前に幅広い方に紙面を通じて周知しました。

開催当日、女子医学生は婦人科見学会に来場した高校生らに10分程度のプレゼンを行い、その後に陽子レディースクリニックの安藤陽子先生から丁寧なご説明もあり、参加した高校生らは婦人科受診に安心感を感じたようです。香川県がんの早期発見キャラクターであるソウキくんも登場し、開催前から来場者をおもてなし&盛り上げて頂きました。



婦人科受診の重要性を高校生に説明している女子医学生メンバー



ドーム広場&ソウキ君担当の広報部チーム。子供たちから老若男女に大人気でした!



見学会後、金西先生・荻田先生・安藤先生と16期の高吉理子先生(三宅病院)、香大病院研修医の鎌田恭輔先生・亀井美里先生と一緒に記念撮影♪



女子医学生全員とコウノドリ荻田先生と集まり記念撮影♪

講演会では、金西先生からHPVワクチン接種の正しい知識と子宮頸がん検診を受診することの大切さや、萩田先生からは漫画「コウノドリ」にこめた未来へつなぐ産科医療や子育て支援に必要な医学知識などご教授頂き、幅広い年齢層の方に正しい情報の啓発を行うことができました。

講演後、萩田先生が医大生時代に交流のあった香川トップレベルのジャズオーケストラSWJO代表・歯科医の関元直登先生率いるNY jazzコンボメンバーとのコラボライブも行い、100人以上の方に参加頂き、大変盛り上がりしました。

令和5年度からはHPV9価ワクチンが定期接種化されることが報告され、次年度はさらなるワクチン接種率向上が期待されます。引き続き讃樹會様および香川大学医学部様のご協力を得ながら、今後も子宮頸がん予防の向上に繋がる啓発活動の展開にご賛同のほどよろしく申し上げます。



ライブ後のドーム広場では、SWJOメンバーと全員集合での記念写真！



金西先生によるメイン講演も大変好評でした。

理事会議事録

令和4年度第2回理事会 令和4年12月19日(月) 19:30~20:00 WEB開催

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、対面の会議を避けWEB会議にて開催する。

当日参加11名及び委任状28名による計39名の参加となり、全理事67名の過半数(34名)以上により理事会が成立した。

1. 国外留学助成金の審査・決定

令和4年度第2回国外留学助成金の申請は、木田潤一郎先生(平成23年卒)1件であり、西内学術局長による1次審査を経ていることが平川会長から報告された。これを受けて理事会による2次審査が行われ、1件の限度額である250,000円満額が交付されることが決定した。

2. その他

三木医学部長より、医学部再開発事業について概要の説明があった。令和5年度からの6年間で、講義棟、実習棟、基礎臨床研究棟、院生研究棟の改修が予定されており、予算規模や再開発により拡充される機能、具体的な改修後のイメージ図などが示された。

令和4年度医師臨床研修マッチング結果について

香川大学医学部附属病院 卒後臨床研修センター

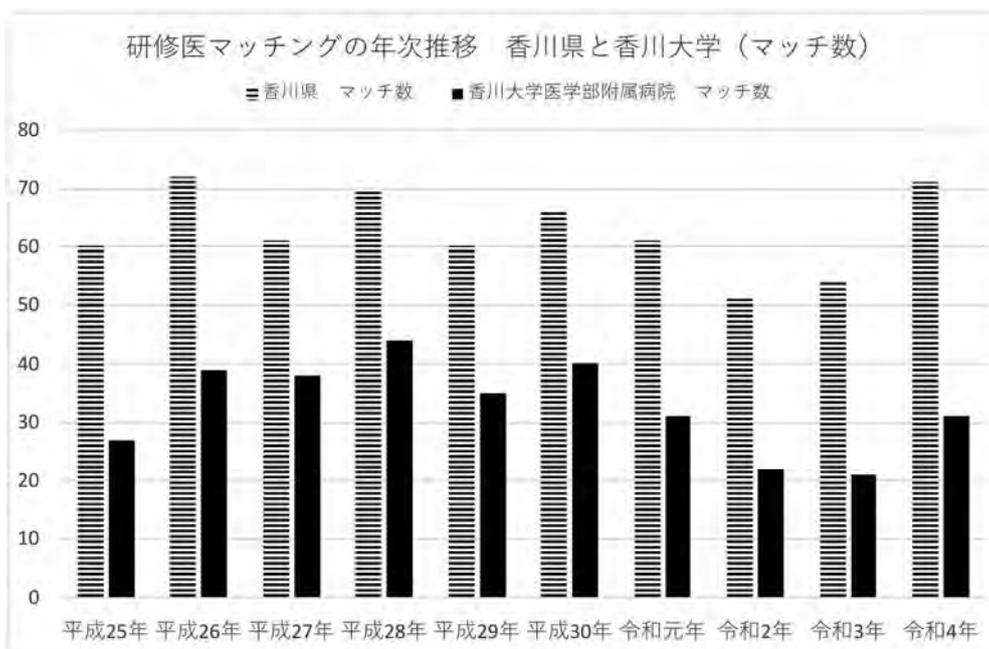
安田 真之 (平成9年卒・12期生)

讃樹會会員の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。平素より讃樹會会員の皆様におかれましては、当センターの活動にご理解とご協力を賜り、この場をお借りして御礼申し上げます。

令和5年度から新たに医師になる医学生が臨床研修病院を選ぶ「2022年度マッチング結果」が、10月27日に公表されました。本院のマッチ者数は、MANDEGANプログラム29名、小児科プログラム2名の計31名でした。このマッチング数は中国四国国立9大学病院の中でも2番目という結果でした。また令和5年度からは医師臨床研修マッチングとは別に、基礎研究医を目指す研修プログラムとして「オーリーブかがわ基礎研究医プログラム」を開始予定であり、定員1名はすでに充足しております。

2004年度より開始された医師臨床研修制度も20年近くが経過しました。その間に制度改革や専門医機構による専門医制度の開始などがありました。全国的な傾向として、医師臨床研修マッチングでは医学生の臨床研修病院指向が強くなっております。本年度の全国に

おける大学病院での研修者は全体の36.5%となり、特に地方大学においてはその傾向が強いと感じています。そのような大学病院における初期臨床研修のリクルートが逆風の中でも、県内唯一の医師養成機関として県内の地域医療を担う人材の輩出と教育を安定的に行うという使命があります。その使命を達成するためには、香川県内の基幹型研修病院や協力型病院（いわゆる襷掛け病院）との連携、協力は欠かせないと考えております。図に過去10年間の香川県と香川大学医学部附属病院における医師臨床研修マッチ数を示します。令和4年度（2022年度）は香川県全体で71名と10年間の中でも香川県へのマッチ数が増加いたしました。これは香川県内の研修に関わる皆様のご協力の賜物と考えております。当センターとしましても、今後ともさらに香川大学医学部附属病院のみならず、香川県のマッチング数が増加し、将来的に香川県内を中心にキャリア形成を行う医師数を増加できるよう努力致す所存です。讃樹會会員の皆様のところにも医学生、研修医が大変お世話になっているかと思いますが、末長く何卒ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



学会開催報告

第7回腎移植内科研究会学術総会

日 時：2022年9月24日-25日

会 場：かがわ国際会議場+ハイブリッド形式

テーマ：「腎移植を見ることのできる内科医の育成」

大会長

香川大学医学部 循環器・腎臓・脳卒中内科
祖父江 理（平成16年卒・19期生）

讃樹會の皆様におかれましては、平素より大変お世話になっております。2022年9月24日（土）、25日（日）にかがわ国際会議場+ハイブリッド形式にて讃樹會のサポートのもと、第7回腎移植内科研究会学術総会を開催いたしました。

本会はテーマを「腎移植を見ることのできる内科医の育成」と掲げ、内科医の腎移植医療への関与を向上させることを目的に、初の地方開催として香川の地で開催させていただきました。おそらくは臨床腎臓病学の領域では香川での初の全国規模研究会であったと思います。腎移植医療は当然手術をしてくださる泌尿器科の先生方のお力なくしてはなしえない医療ですが、慢性腎臓病患者を扱う腎臓内科がもっと参画すべき領域で、腎臓内科のサブスペシャリティの一つとして認識が高まっています。本研究会でも初学者のためのよくわかるシリーズを設けるなど、腎移植を特殊な医療ではなく、一般的な医療として扱うことができるための趣向を凝らした会とさせていただきました。これも、当院の腎移植医療が高く評価されている証左で、この場を借りて杉元幹史教授、上田修史准教授はじめ泌尿器・副腎・腎移植外科の先生方に御礼申し上げます。

同窓の先生方からも、東京女子医科大学八千代医療センター泌尿器科教授 乾政志先生からは『よくわかるシリーズ①腎移植手術』を、香川大学医学部附属病院病理診断科病院助教 伊吹英美先生からは『よくわかるシリーズ②移植腎病理の基礎』を、香川大学薬理

学講座教授 西山成先生からは『ランチョンセミナーCKDにおけるMR阻害の意義』をそれぞれご講演いただきました。一般演題10題も非常に活発な議論がなされました。

また、当院は腎移植・腹膜透析・血液透析の全ての腎代替療法を実施するいわゆる『導入期加算3算定施設』ですが、本研究会よくわかるシリーズを腎代替療法医療専門職推進協会後援『導入期加算3算定施設が実施する腎代替療法に関わる研修』と指定し、全国の導入期加算2施設に対する研修とさせていただきました。『導入期加算3算定施設』は中四国でも3施設のみであり、全国的にもこの研修を必要とする施設も多くございましたので大変好評でした。

未だ新型コロナウイルス感染症が収束しない中、現地参加に加えてリモートでも全国各地から200名を超える過去最多の先生方のご参加を頂きました。この若い研究会がステップアップするひとつのきっかけになったように感じます。教室員の手作りで不行き届きの点も多数ありましたが、参加者のみなさまには温かいお言葉を頂戴し、教室員一同お礼を申し上げます。なお、本学会の開催にあたり、讃樹會をはじめ、多数の連携施設、企業の皆さまからご協賛いただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。引き続き社会貢献を視野に入れた研究・教育活動を続けてまいりますので、今後とも何卒宜しくお願ひ申し上げます。



APASL Oncology 2022 Takamatsu

(The Asian Pacific Association for the Study of the Liver Oncology 2022 in Takamatsu)

日 時：2022年9月1日（木）～3日（土）

会 場：JR ホテルクレメント 高松

テーマ：「Liver Cancer: Clinical and Basic Research」

香川大学医学部消化器・神経内科学講座

谷 丈二、森下 朝洋、正木 勉
(平成14年卒・17期生) (平成9年卒・12期生) (平成2年卒・5期生)

2022年9月1～3日に香川県高松市 JRホテルクレメント高松で、APASL Oncology 2022 Takamatsuを、開催いたしました。本学会は、肝臓学における先端的の研究の国際的な交流と、肝臓学の知識と技術をアジア各国に普及する目的で設立された、アジア太平洋肝臓学会（The Asian Pacific Association for the Study of the Liver）です。このシングルトピックカンファレンスは、テーマを絞って毎年3～5回アジア各国にて開催されている当学会の定例学術集会です。

今回の学術集会では、「Liver Cancer: Clinical and Basic Research」をメインテーマに、肝臓を専門とする研究者が一堂に会し、肝臓病および関連領域に関する基礎的及び臨床的な面から様々な討論を重ね、肝臓病の根治を目指すべく最先端の知識と経験の交流を行いました。

本邦においては、依然として肝臓疾患の罹患率が高く、多くの医師・研究者により肝臓病に関する基礎的及び臨床的研究が現在も続けられており、その成果は国際的にも高い評価を得ています。今回、Liver Cancer: Clinical and Basic Researchをテーマにアジア太平洋肝臓学会シングルトピックカンファレンスを高松で開催することを機会に、本邦がアジアの肝臓病研究および臨床面の指導的立場として、より成熟した学会プログラムを主催することは、本邦の基礎、臨床の高度なレベルを海外に紹介する機会となり、世界の肝臓学の発展に大いに貢献するのみならず、本邦における肝臓学の進歩においても、大きく国民に寄与したものと確信しております。

現在、非常に関心が高いLiver Cancerについての臨床と基礎の面から最新の知見と成果を発表して頂くため、本テーマに関連する分野で活躍する超一流の演者を、日本をはじめ世界各国から214人招聘し、3日間でワークショップ29セッション、口演6セッション、ポスターセッションを行うという非常に密度の高い国際学会となりました。



学会招宴

第1日目、会長正木の東大時代の恩師である小俣先生のAPASLの歴史についてのIntroductionから始まり、ワークショップが行われました。

今回、現地参加をメインとしたハイブリッド開催であり、主催する私たち自身もwithコロナの下、会の準備には非常に多くの労苦がありました。しかしながら、単に国際学会の開催だけをするのではなく、「日本の‘おもてなし’を感じてもらえる学会にしたい」と考えました。会期は国際瀬戸内芸術祭の開催中とし、会場は高松港に面するホテルにあり、そこからは瀬戸内海が一望できる最高の環境であり、瀬戸内の風景を会場に居ながら身近に味わうことが出来ます。更に、日本とアジア環太平洋からの肝臓の臨床医、研究者が集うことから、「若手医師の英語発表の機会をつくろう」と考え、本学会として前例のない形で、ワークショップを多く企画しました。日本・海外より、300演題近くが集まり、活発な議論が行われ、大変有意義な時間となりました。

本セミナーの参加者は世界11か国から686名の参加登録を頂き、多くの方々に参加して頂くことが出来ました。また、学会後の参加者アンケートでも、非常に楽しかった、webではなく現地参加してよかった、といった声を大変多く頂き、大盛況のうちに学会を終えることができました。

香川大学消化器・神経内科講座の主催学会に讃樹會より寄付して頂いたことを心より感謝いたします。また多大なるご支援を頂きました当講座同門会の先生方、そして讃樹會の会員の皆様には厚く御礼申し上げます。



会長講演

追 悼



松田陽子先生
病理学HP掲載写真

松田（旧姓 細谷）陽子先生とのお別れ

石川 かおり（平成10年卒・13期生）

2022年9月17日明け方、香川大学医学部腫瘍病理学教授 松田陽子先生が逝去されました。この2日前に、「またね」と別れたのが、最後となりました。

松田（細谷）陽子先生とは、香川医科大学に入学した同期です。学生時代は接点が少なく松田先生との思い出は多くないのですが、1998年（H10）、卒業後に当時の第二内科（現在の循環器・腎臓・脳卒中内科）に同期8人（青山先生、大下先生、辻先生、真鍋先生、柏野先生、松田先生、筆者、山口大学より故 田井先生）と入局し、一緒に働くことになりました。入局当時を思い出そうとしても、実は記憶が曖昧です。当時は朝の採血に始まり、透析装置のセッティング、外来検査に入院対応、日々のカンファレンスの準備（当時はすべて手書きでOHPシートを作成して、オーバーヘッドプロジェクタに表示）で一日があっという間でした。

松田先生は腎臓グループに所属し、主に腎臓疾患の患者様を担当されていました。当時、腎臓内科の医局では仕事が終わると皆さんで机を囲みゲームを楽しんでいたそうで、本人はその頃が一番楽しかったと話しておられました。現姫路市長の清元秀泰先生からもご指導いただき、私たちはいつもあのパワーに圧倒されていました。いつもオロオロして困っている私と異なり、松田先生は学生時代から変わらず、常に凛として誰に対しても差別無く真摯に対応しておられた事を覚えています。

その後、2003年7月に腎臓内科から腫瘍病理学講座に移籍され、2007年4月からは日本医科大学、2013年12月から東京都健康長寿医療センターで研鑽を積み、2019年4月より香川大学医学部 腫瘍病理学の教授としてご勤務されることとなり、久しぶりの再会を果たしました。大学では担当医としてもかかわらせていただくようになりました。松田先生は高校2年生の時に心筋炎に罹患し当院に入院したことがきっかけで医師を志しておられます。心臓の状態は投薬管理で比較的安定しておりましたので、ジムでトレーニングをしたりすることも可能になっておりました。教授にご就任されてからも松田先生は多忙な毎日を過ごされており、当初は月1回だった外来がだんだん3ヶ月に1回程度にまで延びていましたが、外来では検査をしながら女子トークをしていることが多かった気がします。

2021年6月、いつも大丈夫という松田先生から、体調不良の連絡がありました。同級生で放射線科の室田（旧姓 和田）先生、乳腺内分泌外科の紺谷桂一先生、婦人科の花岡先生には、無理をお願いして検査をしていただき、大変お世話になりました。また、腫瘍病理の業務について全く部外者の私が、失礼を承知の上で急なお願いをしたにもかかわらず、炎症病理の上野教授、病院病理部の羽場教授、医学教育学の横平教授には、大変ご尽力いただき様々な業務を引き受けてくださり、誠にありがとうございます。この場をお借りして心よりお礼申し上げます。また、血液内科の石田

先生、藤田先生は主治医として、常に最善の治療方法を根気よく続けてくださり、改めて感謝の念に堪えません。

闘病中も彼女は常に仕事を優先し、いつもPCに向かって論文執筆や講義の収録、会議への参加をされていました。また、新型コロナウイルス感染症の流行により、県外移動すること無くWEBで会議や学会に参加出来るので、とても辛い状態の時でも、業務に穴を空けないように努め、研究費申請書類なども精力的に

作成されていました。“10年後を見越して計画してって言われたんだけどね・・・”と、寂しそうに言われたときは、言葉に詰まりました。

「思う存分自分の研究ができる教室が作りたい」と私に言ったその言葉通り、自分の事より教室の事を常に考えておられ、職業人としての心構えを改めて教えていただいたと思っております。

松田 陽子先生、心よりご冥福をお祈りいたします。



循環器・腎臓・脳卒中内科学 第4回同門会 2020年1月11日
2段目左から5番目が松田先生、8番目が筆者



2022年12月9日に医学部臨床講義棟にて松田陽子先生を偲ぶ会が行われました。

//// 第11回 ////

～香川大学医学部讃樹會同窓会名誉会長による関連病院訪問記～

香川大学医学部医学科卒業生は3605人となり、1000名以上が県内で医療に貢献しています。一期生卒業後36年が経過し、関連病院も数多くなりました。そのうち基幹病院にも医師が多く派遣され中心的な役割を担っています。

当企画は、基幹病院を中心に、その病院の特色、あるいは病院長の医療に対するお考えを、濱本が直接病院長を訪問しインタビューを行うものです。今回は、2022年11月30日におよそ1時間、四国こどもとおとなの医療センターにお伺いし、横田一郎病院長にお会いして、卒業生の進路等に役立つお話を詳しくご紹介いただきました。

名誉会長 濱本龍七郎

国立病院機構 四国こどもとおとなの医療センターのご紹介



病院長 横田 一郎

病院外観

讃樹會の皆様、平素より大変お世話になっております。先日、讃樹會名誉会長の濱本龍七郎先生が来院され、当院の現況と香川大学医学部卒業生の皆さんの活躍について楽しくお話をさせていただきました。紙面をいただきましたので、当院の紹介をさせていただきます。

当院の概要

当院は、140施設からなる日本最大の病院グループである独立行政法人国立病院機構（NHO）の四国地区基幹病院として、2013年に主として成人医療を提供していた善通寺病院と、小児・成育医療を提供していた香川小児病院を統合し、新たに発足した病院です。

当院の起源は、1897年に旧陸軍第11師団の衛戍病院として開設された2つの病院に遡ります。日露戦争では11師団は乃木将軍の下旅順攻略など主力部隊として

活動し、数千名の傷病兵が海路送還されて病院の廊下まで溢れたと記録されています。第2次世界大戦後は国立善通寺病院および伏見分院となり、伏見分院が1975年に国立療養所香川小児病院となり24時間の小児救急医療や全国に先駆けてドクターカーによる新生児搬送を開始し、香川県を乳児死亡率低下全国一にしています。その後2004年の独法化、建て替え時の統合により125年の歳月を経て現在に至っています。

地域医療支援病院、災害拠点病院、基幹型臨床研修指定病院、新専門医制度基幹研修施設（小児科、麻酔科）、総合周産期母子医療センター、小児救命救急センター、児童虐待医療対応拠点病院、こどものこころ診療拠点病院、厚労省慢性の痛み政策研究事業集学的痛みセンター施設などの施設認定を受け、その名前が表す通り、‘誕生’から‘看取り’まで、そして重症心身障がいのある方にも、あらゆる世代の患者さんに良

質で安全な医療を提供し、地域に貢献することを理念としております。よく「国立は税金で補填されていいね」と今でも誤解されますが、独法化により完全に自主自弁となっています。

当院の担う役割と特色

◆診療機能

当院は689床（一般667床、（児童）精神22床）51診療科、職員数1,100名余、医師98名（非常勤除く）と香川県最大の許可病床をもつ複合型病院です。病床機能は総合周産期特定集中治療管理料（NICU/MFICU、運用18床）、特定集中治療管理料（ICU/PICU、運用12床）、小児入院医学管理料1（四国では当院のみ）、急性期一般入院管理料1、地域包括ケア病棟入院料2、児童・思春期精神科入院料、障害者施設等入院基本料（7：1）と多岐に渡ります。

現在小児・成育医療は、総合周産期母子医療センター、小児救命救急センターとして、香川県、愛媛県東部、徳島県西部の患者さんに、幅広い専門医療、救急医療、重症心身障がい児（者）医療を提供しています。分娩取扱いは県内一で、四国では唯一の日本小児総合医療施設協議会（JACHRI）の加盟施設でもあります。成人医療は香川県西部医療圏の中核病院として、脳卒中・循環器病センター、骨・運動器センター、女性医療センター、透析センター、遺伝医療センター、痛みの医療センター等を開設しています。救急医療に関しては、建て替え時に2階に救命救急センター（救急車も2階に上がります）、CT/MRI/血管造影室、手術室（9室）、ICU/PICU、脳卒中・循環器病センターを集約し、ワンフロアで効率的に行える体制になっており、救急搬送数も3,000件半ばで県内有数です。災害拠点病院として近隣の自衛隊の大型ヘリも離着陸可能なヘリポートも整備しています。

◆臨床研究、教育研修

主要なNHO病院は診療部門とは別に研究部門をもつことが認められており、当院にも1部6室からなる臨床研究部があります。4階に1個病棟分の広いスペースを有し、研究部内には香川大学医学部の連携大学院（成育医学部門と病因・病態解明医学部門）が設置され、私も客員教授を拝命しています。当院に集まる豊富な臨床的研究seedsを利用して、現在も3名が連携大学院に所属し、臨床と並行して学位研究を行っています。

併設する看護学校は定員80名の大型校で、多くの看護師を香川県に輩出してきました。看護師特定行為研修センターも2017年に機構内および香川県で最初に施設認定を受け、現在までに36人の特定行為看護師を送り出しています。

◆ホスピタルアート

当院の特色のひとつとして、より良い環境で療養していただくためにホスピタルアートを積極的に導入していることがあります。病院外壁には地元善通寺市のシンボルであるクスノキの親子が描かれており、また、隣



病院内施設構成

接する善通寺養護学校との共同作業で、卒業制作として様々な場所に壁画を掲げています。病室に掛ける絵画は、美大生やボランティアから寄贈された数百点から患者さんが選ぶことができます。その他職員がボランティアと協力して毎年少しずつアート作品を増やしています。

当院のホスピタルアートは、単に有名作家の作品を飾るのではなく、病院職員が患者さんと自分たちの環境をアートでより良いものにしていこうという理念の元、継続して行われています。



5階の医局ラウンジ

附属看護学校から見た病院北面とヘリポート、救急搬送路



香川大学医学部、医学部附属病院との連携

先に書いたように、当院には香川大学医学部の連携大学院が設置されており、また、幅広い診療科で優秀な人材を派遣いただき感謝いたしております。現在8診療科で18名の医師（うち専攻医4名）が活躍しています。香川大学からの学生実習受け入れや、初期、専門研修プログラムでの香川大学卒後臨床研修センターおよび各診療科のプログラムの協力施設として、とくに地域枠の先生方には高松地域外で幅広い症例経験を積める貴重な大型病院ではないかと思っております。

NHOという国（厚労省）と繋がった病院であると同時に、香川県に根差した地域医療支援病院として、讃樹會の先生方と共によりいっそう香川の医療に貢献して参りたいと思います。今後ともご支援、ご指導を賜りますよう、よろしく願いいたします。



病院ロゴマーク



前列左より 濱本龍七郎讃樹會名誉会長、横田一郎病院長
 後列左より
 福田有子 中央診断・検査センター部長
 久保井徹 新生児内科医長
 鳶村将志 整形外科医長
 細谷裕太 小児心臓血管外科医師

書籍紹介



『時代遅れの恋人たち』

著者名 西 綾
 発行所 パレードブックス
 発売日 令和4年6月1日
 価 格 単行本990円
 電子書籍693円



『ごろごろ四国遍路道』

著者名 根間洋明
 発行所 東京図書出版
 発売日 令和4年8月8日
 価 格 1300円(税抜き)

平成3年卒、6期生の堀 恵です。

卒業後は、高松市内の大西病院に精神科医として勤務しています。

昨年6月1日にパレードブックスより「時代遅れの恋人たち」(筆名:西 綾(にし あや))を上梓致しました。

還暦の記念にこれまでの歩みを振り返り、私の人生に影響を与えた人物との関わりを書きました。

表題作の「時代遅れの恋人たち」は、医大時代の同期生M君との友情について、そして「時の過ぎゆくままに」は心を病んだ叔母と過ごした日々を描きました。

「時代遅れの恋人たち」のモチーフになった作品は、石坂洋二郎氏の「寒い朝」です。作中でヒロインのとみ子が、やはり男友達の重夫のことを作文に書き、最後に「私のようなチンピラ女学生にはひとりの異性を描くことは荷が勝ちすぎているかも知れない」と自省します。とみ子と同様に、私もM君のことを客観的に描けたか自信はありません。ただ、小説を書くという行為もまたH.S.サリヴァンの言葉通り「関与しながらの観察」なのだとの思いを新たにしました。

もう一篇の「時の過ぎゆくままに」は、双極性障害を病んだ叔母がモデルであり、テーマは「人は人を救えるか?」でした。作品の結末から考えると「救えない」こととなりますが、精神科医として仕事をしていても、患者さんを救うのは難しいことだと感じます。

しかし、「救うことはできないとしても、伴走者としてともに歩むことはできるかも知れない」—作中にそう書きつつ、自分の仕事を改めて見つめ直すことができました。この作品のモチーフは、作中にも登場しますが、立原正秋氏の「新能」です。立原氏のように滅びの美学について描けたことに自信はありませんが、限りあるものであればこそ美しいということを認識する機会にも恵まれました。

拙い作品ではありますが、お読みいただけたら幸いです。

紙の書籍のほか、Amazonなどで電子書籍も販売しております。ご感想などがありましたら、ぜひ堀までお寄せください。

7期生の根間洋明です。このたび、学生時代の経験を基にした本を出版させていただきました。僭越ですが内容について紹介させていただきます。私の学生時代、1980年代後半はバブルの真っ盛りで、瀬戸大橋や高速道路など交通網が整備される一方で、宇高連絡船の廃止など失われてゆくものもありました。その時代の雰囲気、良き人を描きたいと思いました。当時始まったものでメジャーになったものは緑茶、アサヒスーパードライ、ハンディカム、マイケルジャクソン、プリンセスプリンセスなどがあり、それらも織り込むことで時代の雰囲気を表現したつもりです。また、四国で出会った魅力的な人々を浮かび上がらせるには、背景をしっかりと描かなければなりません。その考えのもと、四国の自然、歴史を記述しました。私の学生時代の経験の多くは探検部での活動から得られたもので、この本も探検部での活動を幅広く紹介しています。中でも大学4年生の夏に断行したローラースケートによる遍路旅は過去に例のないことで、私にしか表現できないであろう、ローラースケートによる旅の詳細を本の背骨に据えました。そのほか、香川医大生にしか表現できない学生生活なども、もちろん盛り込んでいます。本の中には同期生が13人、サークルは探検部、ひばり、社会医学研究会、女子医学生の会が出てきます。学園祭の様子や多和診療所のことまで描きました。

四国88か所の面白いところは、「ぐるっ」と回って、振り出しに戻るところです。終わりが次の始まりであり、そのことが疲れるというより、むしろ、活力につながる感覚があります。安直な言葉で表現すると「面白い」です。宝石のようなエピソード満載の本を是非お楽しみください。



『私のキャリア』 ケーススタディ Vol. 2

はじめに

『医師の2024年問題』という言葉聞いたことがありますか。2019年に施行された「働き方改革関連法」に伴い、医師の『働き方改革』は2024年4月から施行される予定です。

実際、日本の医療提供体制が医師の献身的な努力で支えられてきたと言っても過言ではありませんが、そもそも『働き方』はライフスタイルと密接に関連します。医師としての存在意義や責任感と、自分自身の人生との調和をどう保つかで、悩んだことがある医師は男女問わず少なくないでしょう。

このコーナーでは、医療を取り巻く環境が変わりゆくなかで、卒業生の皆様が個々に抱える悩みや課題をどのように乗り越えてきたか、その経緯や打開策等を幅広く紹介させて頂きたいと考えています。

皆様のキャリアアップの参考として、自分らしく働き続けるためのヒント探しの一助となることを願っています。今回は、メーカー勤務を経て医師になった男性にお話を伺いました。

(担当：泉川美晴)



40代男性・妻・子供三人・香川県在住・総合病院勤務（内科）



▼ キャリア年表

卒年	WORK	LIFE
卒年-X年	某大学大学院工学系研究科修士課程修了 某メーカー勤務	
卒年-5年	某メーカー退職 香川大学医学部編入学	
卒年	香川大学医学部卒業	
卒後1年	大学病院で初期研修開始	
卒後3年	入局 大学病院で内科専門研修開始	長女受験
卒後5年	市中病院勤務	
卒後6年	大学病院勤務 内科専門医取得予定	長女受験、次女受験

▼ Q&A

- Q. 社会人から医学部受験をしようと思ったきっかけは何ですか？
- A. 長女と長男を大きな手術で救命していただいたことがきっかけで、医療の世界に興味を持ちました。
- Q. 現在のキャリアに至るまでに感じた壁はありますか？
- A. 一回り以上年下の同期や先輩方とのコミュニケーションをどうとったらよいのか、当初は戸惑いました。
- Q. そのとき、どのようにして壁を乗り越えましたか？
- A. 社会人であったことは忘れて、同期や先輩方に遠慮なく甘えるようにしました。
- Q. これまでに大変だったことは何ですか？
- A. 業務に追われ、体力的、精神的に追い詰められることがよくあります。
- Q. 大変だったときにサポートとなった人物や支援、制度などあれば教えてください。
- A. 妻に愚痴を聞いてもらったり、子供に遊んでもらったりすることで、気持ちを切り替えています。
- Q. 今後、どのようにキャリアを積んでいきたいですか？
- A. 短期的には内科専門医、サブスペシャリティの専門医を取得できるように経験を積んでいきたいです。長期的には、社会人の経験を活かせるような産業医の分野にも携わっていきたいと思います。キャリアの選択に際しては、家族との関わりを保てることを優先したいと考えています。
- Q. 医師の働き方についてどのようにお考えですか？
- A. 職場や立場によって大きく異なるとは思いますが、当直等も含めると、市中病院では休日が一般的な会社員の半分にも満たない印象です。また、夜間や休日にも病棟から連絡、呼び出しがあり、完全にオフになる時間がありません。肉体的にも、精神的にも相当タフでなければ務まらない仕事だと感じています。若手の時期にとことん仕事に打ち込む時期はあってしかるべきと思いますが、人生において家族との関わりを特に大切にしたい時期に重なると、両立が難しくなる場合があるかもしれません。

▼ 学生・研修医へのアドバイスなど

周囲が気になるかもしれませんが、他人と自分を比べ過ぎない方がよいと思います。思い通りにならないことがあっても、それぞれのペースで成長していけばよいのではと思います。

支部会・懇親会

支部会開催報告 第21回関東支部会

メインイベントは「ごろごろ四国遍路道」四国って面白い！

医療法人橘会 東住吉森本病院 副院長 兼 救急・総合診療センター長
池邊 孝 (平成4年卒・7期生)

はじめに

入学時は6期生、卒業時はなぜか7期生の池邊孝(いけば たかし)です。大阪出身で勤務地も大阪なのですが、関東支部会長である、もと同期の内山順造先生(6期生、以下内山くんと呼ばせてください)からご案内いただき、二つ返事で参加させていただいた次第です。また、私自身が高校時代を高知県室戸市ですごしたこともあって、根間洋明先生(7期生)による表題のご講演を楽しみにしておりました。今から思えば本会はコロナ第8波の入り口あたりの時期に開催されたことになりましょうか。とにかく2022(令和4)年11月19日(土)Webにて開催されました。1期生から19期生まで、関東支部会の会員、探検部のOB・OGの皆様そして根間先生と同期である7期生の面々、計27名が参加されました。

19:30開始ということで、夕食の時間帯でもありましたので、開始前の打ち合わせ中、内山くんを確認したところ、飲食しながらの参加は大歓迎とのこと。実はすでに内山くんもビールを飲んでいとのことでした。私事ではありますが、前日が当直で、明けはそのまま日勤という、働き方改革を無視した長時間労働を終えての参加になりましたのでほっといたしました。ご参加のみなさまもおそらく同じようにおなかのすいた状態だったと思います。内山くんからのご指名で、僭越ながら私が乾杯の挨拶をさせていただき、開始となりました。

近況報告

まず、探検部のOB・OGはじめ、ご参加の方々から、ご挨拶と近況のご報告がございました。1期生の國吉

毅先生(以下國吉さん)から、同郷の沖縄県出身である根間先生が学生のころから懇意にされていたとおききして驚きました。さすが國吉さん、面倒見がいいなあ。國吉さんには野球部時代に私も大変お世話になりました。約30年ぶりの再会ではありましたが、國吉さんは学生時代とかわらず、大きく優しいままでした。もと同期の秋山正史先生(6期生)とも会えました。彼とは学生時代に数名で北陸まで貧乏旅行をした仲でした。当時は時々羽目を外すやんちゃなムードメーカーでしたが、年月と経験がそうさせるのでしょうか、とても落ち着いていて本当に同一人物か疑ったほどでした。そしてWeb開催のいいところでしょう、今回は海外からも参加がございました。7期生の入交重雄先生がアメリカ・ロサンゼルスから、夏休み中、しかも現地時間午前3時にも関わらずご参加されました。ゆっくりかつ朴訥とした話し方は午前3時で眠ったのか、もともとそんな話し方だったようにも思いますし、とにかく懐かしかったです。驚いたのは3期生の清元秀泰先生。タイのバンコクから参加されましたが、なんと兵庫県の姫路市長になられていて、このと



きはAPECに出席しておられました。私の記憶に間違いがなければ、清元先生は学園祭の名物DJで、放送禁止用語を連呼していたあのヒトのはずですが、間違っていたらごめんなさい。かくいう私も、バンカラにあこがれて学ラン、学帽に下駄ばき、そして腰に手ぬぐいといった風貌で通学していた変人でしたのでえらそうなことは言えません。いやー、みんな立派になったなあ。18期生の岩部真人先生は2022（令和4）年に日本医科大学大学院医学研究科 内分泌代謝・腎臓内科学分野 大学院教授に就任されており、この若さでの教授就任は出世頭の筆頭と言えるでしょう。また、内山くんから「ぼくは岩部先生に引き継ぐために今関東支部会長をしている」と皆の前で公言されたので、好むと好まざるに関わらず、岩部先生は次期関東支部会長の任をお受けせざるを得ないでしょう。なにより適任だと思います。その他にも学内外で要職につかれている先生が多数おられて、各方面で活躍されており、あらためて母校を誇らしく思いました。

歌のご披露

続いて9期生の伊藤美奈子先生による歌のご披露がございました。医師でありミュージシャンでもある先生は、さすがプロ、なんと音楽スタジオから参加されました。歌の題名はLullaby（ララバイ）of Birdland（バードランドの子守歌）。ネットで調べたところ、ニューヨークのマンハッタンにある往年のジャズクラブ「バードランド」にちなんで、1952年に盲目のピアニスト、ジョージ・シアリング（1919-2011）によって作曲された作品で、のちにジョージ・デヴィッド・ワイス（1921-2010）によって歌詞が付けられました。ロマンチックな中に切なさや悲しさを含む歌詞で、しっとりとしたメロディーにのせて、伊藤先生が歌い上げられました。伊藤先生のご主人は3期生の伊藤理先生で2019年にご逝去されました。内山くんが「心にしみる良い歌でした、きっと理先生もそばで聴いておられると思いますよ」と言われ、私も胸が熱くなりました。伊藤先生すばらしい歌のご披露ありがとうございました。



伊藤 美奈子



Masato Iwabu

ご講演「ごろごろ四国遍路道」四国って面白い！



根間 洋明先生

さて、メインイベントは根間先生によるご講演です。沖縄県出身の根間先生ですが、北海道の勤務先からのご参加でした。もちろん室内からでしたが、それでも相当寒いのでしよう、防寒具に身を包んでおられました。「ごろごろ四国遍路道」は根間

先生が香川医大での学生時代にローラースケートでお遍路をめぐり四国一周をした経験を本にされたものです。2022（令和4）年8月8日にリフレ出版から初版が発刊されました。本稿を執るにあたり、遅ればせながら本著をアマゾンで購入いたしました。ハードカバーの分厚い本で、こういう機会がなければおそらく手に取ることはなかったと思います。最近何をするにもおっくうになり、新聞も読まなくなった私でしたが、自分が過ごした四国の風景や学生時代の思い出を重ね合わせるうち、一気に読み進められました。題名の「ごろごろ」はローラースケートの音であると同時に、四国一周を決断した夜、激しい雷雨で、その雷が「ごろごろ」と鳴っていた音でもありました。



根間先生は学生時代をふりかえって、いろいろな出来事とその後の自分の考えに影響しているとお話されました。探検部に入って、初めての本格的な登山の際、他大学の学生に馬鹿にされたことで発奮し、1年生でありながら自らの意思で部長を務めるに至ったとおききました。その決断力と行動力は並々ならぬもので、その後のローラースケート



での四国一周につながったのだと思います。まずその準備として、ローラースケートで大学に通うようになります。みなさまご存じの通り、母校は高台にございます。大学までの坂を登り下りすることで訓練されました。

1989（平成元）年、根間先生が4年生の夏、一番札所である徳島県鳴門市の靈山寺（りょうぜんじ）から旅は始まりました。学園祭での上映のため同期の山口修先生がビデオ撮影で所々同行はするものの、ほとんど独りぼっちでの旅となりました。徳島→高知→愛媛→香川と、札所となる寺院を順番に訪れます。道中に出会った様々な人々との出会いの中で、四国ならでは、その土地ならではの温かな、時には少し迷惑な「お接待」を受けながら旅は進みます。時にはユースホテル、時には宿坊、時には道路わきのベンチで宿泊。四国出身の同期の実家に泊まることもありました。高知医大生との思わぬ交流があったり、宿の女性とのロマンス(?)があったり、なかったり・・・途中、転倒によるケガでの中断を余儀なくされながらも、そして免疫学の試験を直前に控えながらも、1か月余りで最終地点である八十八番札所の大窪寺（おおくぼじ）に到達しました。著書では「誰もやってないことに挑戦したかった、お遍路の千二百年の歴史に新たな1ページを加えた」と旅の目標と感想を述べられています。また、「探検とは好奇心のみでは済まない重い荷物だ」とも。当時、根間先生の偉業を新聞が報道したものの、真意とは異なる報道となり残念だったと締めくくっています。

一方、根間先生は音楽の素養があり、探検部や学園祭のテーマソングをみずから作曲されました。今回、それらのオリジナル曲を自らハーモニカでご披露いただきました。とくに学園祭のテーマは今回の旅の中で完成したもので、根間先生だけでなく、皆にとって思い出深いものでした。残念ながらWebでの音響が今ひとつで、聞き取りづらい面はありましたが、根間先生の当時の想いはじゅうぶん伝わってきました。

根間先生は1986（昭和61）年入学で私の1年後輩にあたります。私は3年生の時に留年したので、3～6年生の間、同じ教室にいたこととなります。しかし、不真面目な私は必要最小限の授業しか出ず、もっぱら留年仲間とつるんで麻雀ばかりしていたため、正直、根間先生のことをよく覚えていません。自堕落な学生生活で留年までしてしまった私からみると、自意識がしっかりしているというか目的を決めてそれに向かう強さをもっている根間先生は対極にいる存在で、眩しすぎて目を背けていたのかもしれませんが。

あれから30年以上たった今でも、昨日のことに、その時の感情や情熱そのままにこれだけの長編が執筆できているわけで、根間先生のエネルギーには衰えはなさそうです。これからも様々な形で私たちに元気を分けてください。



おわりに

内山くんの軽妙な話術で会は進行し、盛り上がりを見せる中、あっという間に3時間がすぎ、閉会となりました。コロナの収束がまだみえない中ではありますが、このようなWebでの同窓会は、遠方どころか、

海外からの参加も可能で、盛り上がること間違いなし。ぜひ各地の支部会でも行っていただきたいと思います。最後に、事務局のみなさま、ご準備大変だったと思います。感謝申し上げます。乱筆、乱文お許しください。



学生の短期留学報告

ニューキャッスル大学留学報告書

医学科6年 宮川 友結



私は血液内科で2週間、感染症で2週間、小児科で2週間、その中の数日をGP(家庭医)で実習をしました。

血液内科では凝固異常外来と血液腫瘍病棟でお世話になりました。他の科でもそうですが基本的に外来はその日毎に決まった疾患を扱うので、症状に加えて検査・治療の流れが分かり易いと感じました。また、患者さん自身が病気と治療をどのように理解しているか時間をかけて確認していたのが印象的でした。病棟では若手の先生からレクチャーがある以外は、好きな時間に病棟に来て先生に質問したり、興味のある手技をさせてもらうように直接お願いすることができたので、先生方に話しかけると生検の様子を見せてくれたり採血をさせてくれました。

感染症科では結核・HIV・新型コロナウイルスの感染者など、今まで接触したことのない病気の患者さんに沢山会うことができます。実習中に見学させてもらったコロナ患者の長期フォロー用の外来というニューキャッスル大学が独自に始めた形式が大変興味深く、精神科医、感染症内科医 or 呼吸器内科医、物理療法士の3人の専門家による診察に加えて、呼吸機能検査・血液検査をその外来に来た患者さんは全員受けていました。病院のスタッフが以前コロナに感染し

た人にアンケートを取って、診察の必要があると判断されたらその外来に呼ばれる流れになっており、患者さん全員の診察が終わったら、診察に関わったメンバーで会議を行い情報共有をしていました。

小児科では Assessment Unit と感染症・膠原病内科で実習を行いました。Assessment Unitでは、一人で患者さんの問診と身体診察をした後にプレゼンをし、また先生の診察に同席するというのをさせてもらいました。初日にプレゼンをした際、まず型を身につけることが大事だと教わりました。聞き漏らしや見逃しを無くすことに加え、医師が使っている言葉や文脈に慣れることで相手が理解しやすいプレゼンになることを痛感しました。感染症・膠原病内科病棟には頻度の高い感染症から稀な自己免疫疾患を持つ子ども達がいるので、Assessment Unit と同じく問診と診察をさせてもらった後に、先生と画像やカルテを見ながら考えられる疾患や必要となる検査について話す、といったことを繰り返しさせてもらいました。

GP(家庭医)の実習では寮から数駅の場所にある診療所に伺いました。以前から日本人学生の実習を受



▲タイン川が海に注ぐタインマウスという海岸での写真です。この時食べたフィッシュ&チップスが一番美味しかったです。(右から2番目が筆者)



▲血液内科で実習している時にお世話になった後期研修医のダイアナ先生との写真です。ベッドサイドで患者さんに丁寧に誠実に向き合う姿が印象的でした。

け入れている先生なので、私が興味を持つ点も理解して下さり GP について詳しく教えて頂くことができました。イギリスの医療の大きな土台となっているのが GP によるプライマリケアです。イギリスでは日本のように国営医療保険があり原則無料で医療が提供される仕組みになっています。何か体に異常が起きた時は、まずかかりつけの GP の診察を受け、精密検査や更なる治療が必要な場合は専門家に紹介してもらいます。GP の役割はそれだけでなく健診やワクチン接種、終末期医療など多岐にわたります。また、平均化された医療を提供するために政府は評価項目を設けており、例えば、受け持ち患者のある年齢のある性別のうちワクチンの接種率は何パーセントを超えれば何点、というように点数を基に政府は診療所に対する支給額を決めます。このように、診療所の経営者としても患者に適切な医療を提供する動機が GP に生まれるように設計されており、データがすぐに参照できるように一括管理されている点が日本とは大きく異なっていました。

生活について少し書くと、病院から徒歩10分ほどの

寮で生活していました。例年とは異なる寮だったので参考になるか分かりませんが、個人の部屋はかなり広く、ベッド、机・椅子、クローゼットが備え付けです。タオルとシーツもドアの前に置いておけば週一回交換してもらえます。キッチンとお風呂は共用でランドリーは別棟でした。

寮でできた友人と映画館に一緒に行ったこと、キッチンでおしゃべりしながら料理をしたことは一生忘れません。留学を考えている後輩の皆さんも実習先や寮で気の合う人と出会えることを祈っています。



▲留学中に3度訪れた映画館タイムサイドシネマです。昔ながらの映画館でカフェやバーも併設しています。

学生支援（競争的資金）活動報告

2022年度

讃樹會では、学生生活の活性・充実に資することを目的とした学生支援を行っています。採択は年間5件に限られます。このことにより、将来的な競争的資金獲得の練習の場となることも期待しています。（2023年度募集要項は讃樹會HPを参照下さい。）

香川国際協力NGO U-dawn ーカンボジアの新生児死亡率低下の第一歩ー

香川国際協力NGO U-dawn 3期代表
医学科4年 茂木 貴慧

香川国際協力NGO U-dawnは、2021年4月11日に、香川大学医学部の学生数名で設立した国際協力団体です。現在は、香川大学の全学部から同じ志を持つ学生を募り、カンボジアへ、医療・水・教育の3方面からの支援を計画し実行しています。

今回いただいた資金は、医療支援に使わせていただきましたので、医療プロジェクト（以下、医療P）に絞って活動報告をいたします。

医療Pでは、特に「新生児医療」の分野の支援をしています。カンボジアの新生児死亡率は日本の14倍に及びます（「ユニセフ世界子供白書2021」参照）。これは、ポル・ポト政権下の大虐殺を背景に、医療機器だけでなく、医学教育の機会の不足による影響が大きいです。2021年度の活動として、クラウドファンディングを実施し、新生児蘇生（NCPR）の訓練用人形2体を購入しました。2022年5月に、この訓練用人形2体を、カンボジアで活動されているNPO法人であるSide By Side International へと寄贈すると共に、プノンペンに位置する国立クメールソビエト友好病院で、第1回NCPR講習会を開催し、約30名の医師・看護師・助産師に参加いただきました。また、学生におけるNCPRの知識獲得のため、香川大学医学部附属病院の小児科・新生児科の先生方にご協力いただき、医療Pメンバー6名がNCPR講習会を受講しました。8月には、3名がカンボジアへと渡航し、カンボジアの国立カルメッ

ト病院の医師と連携し、第2回NCPR講習会を開催しました。現在は、国立カルメット病院に訓練用人形1体を貸し出し、所属する助産師に向けたNCPR講習会を定期的に開催して、知識の定着を図っています。また、8月の渡航時の聞き取り調査で、カンボジアでは多くの妊婦が妊婦健診を1回も受けないまま出産に臨むということを知り、医療者の意識向上と共に、国民の妊娠健診に対する意識改革の必要性を強く感じました。今後は、定期的にNCPR講習会を開催することと、香川の企業であるメロディー・インターナショナルと連携し、モバイルCTGを利用した健診の簡便化によってカンボジアの妊婦健診受診率を上昇させ、より安全なお産ができる環境を整えることの2軸のアプローチにより、カンボジアの新生児死亡率の低下に寄与していきたいと考えています。

U-dawnは、『今日笑顔を守り、明日の可能性を広げる』をビジョンとして活動しています。カンボジアの人々の笑顔を増やすという大きな目標のもと、香川大学生の挑戦の場となり、香川大学、ひいては香川県全体に笑顔の連鎖を生むことが私たちのゴールです。

引き続き、温かい応援を賜ると幸いです。

HP：<https://u-dawn.com>



学生ACLS勉強会の年間の活動

学生ACLS勉強会 代表
医学科3年 小田 桐子

私たち学生ACLS勉強会はBLS (Basic Life support) と呼ばれる心肺停止または呼吸停止に対する救命処置に必要な胸骨圧迫や人工呼吸などの一般市民に求められていることからACLS (Advanced Cardiovascular Life Support) と呼ばれる病院等医療施設において医師を含む医療従事者のチームによって行われる救命処置に必要な気道確保のための気管挿管の方法や換気、除細動器の使い方などの将来医療従事者になるものとして知っていなければならないことをシュミレーターと実際に現場で使われている道具を用いてトレーニングしています。また、BLS選手権という大会やBLS及びACLSのプロバイダーの資格取得を目指して、自分たちがトレーニングしてきた内容に加えてガイドラインで改正された所や私たちが受けてきた講義の内容の確認といった発展的なことを学ぶために勉強会を実施したりしています。

そして、私たちが普段練習している内容をスライドやテキストを作成したり、デモンストレーションとして見本になれるよう技術を極めて、毎年夏と冬に一回ずつ他の学生に対して“突然の心停止に対して最初の10分間にできる救命法”をテーマとして実践形式で講習会を開いています。この講習会では代表的な心停止の心電図波形を読み取ることと各場面での手技を習得することはもちろん、将来の医療従事者として働く私たちにとって非常に重要なチームとして働く意識を受講生の学生と私たち学生ACLS勉強会の学生共に改めて認識することを最終的な目標として一日かけて講習会をします。

近年は新型コロナウイルスの影響により実施できていませんが、毎年この香川大学医学部と徳島文理大学の学園祭にお邪魔して、外部から来て下さる方々にもBLSを人形を用いて教えるという活動も行っています。



第43回香川大学医学部祭開催報告

2022年10月7日～10月9日

第43回医学部祭実行委員長 医学科3年 東 ひかり

第43回香川大学医学部祭が10月7日～10月9日の三日間にわたって行われました。今年も新型コロナウイルス感染拡大が懸念され開催が危ぶまれたこともありましたが学内限定開催にすることでなんとか執り行うことができました。

本年度の医学部祭で私たちが掲げたテーマは、「復活～医学部祭が帰ってきた！おかえり！～」でした。新型コロナウイルス感染症により、医学部祭を知っている学生が少なくなってきた今、開催することに意味があると感じ、それを「復活」という言葉に込めました。そして、「おかえり！」を加えることで医学部祭とは自分たちが主体となってするものであるからみんな一丸となって盛り上げていこうという意味を込めました。このテーマを実現させるために、学祭を経験したことがない3年生が主体となり自分たちで分からないなりに死力を尽くして準備を進めてまいりました。また、今年度の学祭は例年の学祭よりも制限されることや改定されることも多く、我々自身、学祭がどういふものになるのか不安だらけの日々でした。しかし、いざ学祭が始まると、実行委員一人一人が自分の仕事を全うするべく一生懸命働いてくれたり、各部活の店長も学祭を経験したことが無いにも関わらず盛り上げようと頑張ってくれました。また、ダンス部、軽音楽部、S-poのステージライブでは、学祭のために夜遅くまで練習していたメンバーがはちきれんばかりの笑顔でステージに立っている姿を見て、自然と涙があふれてきました。さらには、香川大学医学部祭の一環として学生・教員有志による研究発表会が行われました。まずは、当企画にご協力頂いた全ての方に御礼申し上げます。発表者の先生からは「異なるバックグラウンドを持つ人々の前で発表することができ大いに刺激になった」との感想を頂きました。また、公演中の質疑応答では、異分野教員間や教員・学生間での活発な質疑応答が行われました。本企画が香川大学医学部の教育・研究に資することを願ってやみません。

そして学祭が終わると、たくさんの学生から「学祭本当に楽しかった、開催してくれてありがとう。」と

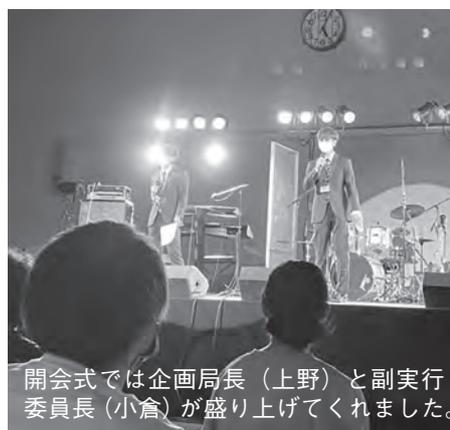
言ってもらえ、この半年間大変なことの方が多かったけれど無事開催できて、皆が楽しんでくれて本当に良かったなど達成感でいっぱいになりました。

頼りない学祭実行委員長で先生方や実行委員の皆にたくさん迷惑をかけてしまいましたが、周りの皆に支えてもらいながら最後までやり遂げることができたこの経験は、これからの自分の人生において貴重な財産になりました。

最後になりましたが、一医学部祭としてこれほど皆の心に残る素敵な香川大学医学部祭を開催することができたのは、讃樹會、医師会、学生会、後援会、学友会、本学の皆様、香川大学の教職員の皆さまのご支援・ご協力あってのことと、改めて厚く御礼申し上げます。今後ともご指導・御鞭撻のほどよろしく願いいたします。



開会式の挨拶はとても緊張しました。



開会式では企画局長（上野）と副実行委員長（小倉）が盛り上げてくれました。



開会式では多くの方が体育館に足を運んでくれました。



本部待機の実行委員のもとに多くの方が応援や差し入れをしに遊びにきてくれました。



夜遅くまで企画局のリハーサルを行っていました。



ビンゴ大会の司会、頑張りました。



リハの合間にパシャリ



忙しすぎて知らない人のカバンまで背負ってました。



ビンゴ大会の景品集めに大忙しでした。



お揃いの服でベストコンビ司会頑張りました。



頑張った後のご飯は美味しい。



こんなに楽しい学祭はない！！

編 集 後 記

年末年始、皆さまはどのようにお過ごしになったのでしょうか？ ここ最近ではコロナ関連やウクライナ関連で悲しい話題ばかりでしたが、自分は久しぶりにFIFAワールドカップカタール2022をTVで見て熱い気持ちで過ごすことができました。重症化のリスクが下がったとは言え、年末年始の感染者は世界一位となるなど先生方も日々の診療で忙しい日々を送られていることと思います。

2022年のイグノーベル経済学賞を受賞した「なぜ最も才能のある人ではなく、最も幸運な人が成功することが多いのかを数学的に説明したことについて」という研究が話題になっていて面白く読み込んでしまいました。従来、成功が「才能」などによって決定されている社会通説に触れた上で、「それでは運はどれほどの影響を与えるのか？」という問題を提起していました。その違和感の根源は、「才能」はガウス分布するのに対して、富（論文内では成功と同義）はパレートの法則に分布するからだそうです。一個人が「運の発生頻度」をコントロールすることはできないため、成功の確率を高める最善の戦略は、行動量、アイデア量、人生で関わる人数を増やすことだそうです。新しい試みをする際に一定の予算を準備している環境において「優秀そうに見えるアイデア」に全予算を割り振るのではなく、「全アイデア」に予算を均等に分配する方が好ましいという事がわかります。

さて、年頭所感を讃樹会副会長の中村文洋先生から頂きました。同窓生教授就任挨拶を、平成12年卒の川越いづみ順天堂大学大学院麻酔学教授よりいただきました。讃樹会も、明るい話題の多い一年になることを期待したいと思います。さて、ニュースの窓では「臨床研修マッチング結果」や「讃樹会市民公開講座」が掲載されていますので、ご一読ください。また、関連病院紹介では、四国おとなとこどもの医療センターの特集を掲載しています。ここで、悲しい話題ですが香川大学医学部の13期生で腫瘍病理学教授の松田（旧姓 細谷）陽子先生の追悼記を石川かおり先生に寄稿いただき、讃樹会からも安らかなご冥福をお祈りさせていただきました。

毎号のことながら、ご多忙中にも関わらず寄稿してくださいました皆様、讃樹会会員、事務局の皆様にご心より感謝申し上げます。更に親しまれるような紙面になるよう、微力ながら努力してまいります。些細な事でも結構ですので、ご意見ご提案がございましたら宜しく願い申し上げます。

広報局長 谷 丈二（平成14年卒・17期生）

事務局からのお知らせ

〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1
TEL 087-840-2291
E-mail mddousou@kagawa-u.ac.jp
HP <https://dousoukai.site/sanjukai/>

- ◆医師賠償責任保険を年間通じて受け付けています（途中加入ができます）。詳細は事務局にお問合せ下さい。
- ◆国外留学助成金を公募します。
2023年度国外留学助成金
第1回 2023年3月末日締切
第2回 2023年9月末日締切
- ◆2023年度研究助成金／研究奨励金を公募します。
2月1日～4月28日（締切厳守）
- ◆準会員対象で、「学生の国際交流助成」（海外留学から帰国後1ヶ月以内）、「学生支援（競争的資金）」（6月末日締切）を公募します。
- ◆助成金等の申請の詳細は、讃樹会HPの「要項・ダウンロード」を参照下さい。
ふるってご応募下さい。

訃報

名誉会員

高原二郎先生 2022年9月

正会員

松田陽子先生（平成10年卒・13期生）
2022年9月

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。